

第 6 7 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成25年4月9日
日本建築学会近畿支部

No.	作品名	学生氏名	大学・学科	図面枚数
1	まちの中のいえ	小嶋 真由	大阪市立大学 建築学科	3
2	終わりと始まりの場所	田中さつき	京都工芸繊維大学 造形工学科 (建築2)	6
3	Lifeschool ー菖蒲池における住民のための学び舎ー	母里真奈美	大阪産業大学 建築・環境デザイン学科	6
4	「生態系を小屋はつくる」	亀井 洋樹	京都精華大学 建築学科	7
5	fantasic factory ー染色工場との新たな付き合い方ー	徳永 悠希	神戸大学 建築学科 (建築デザイン)	8
6	幼稚園という恩物 ーフレールルの二十一番目の恩物にむけてー	天木美菜見	大阪芸術大学 建築学科	11
7	本に親しむための空間	五十棲友来	大阪工業大学 空間デザイン学科	5
8	懸け橋のまち ー岩手県宮古市の復興拠点計画ー	大柳 華子	京都女子大学 生活造形学科	6
9	THE ART CRANE for Artists, for Citizens, for London.	本木 克弥	大阪工業大学 建築学科	10
10	1 structure3occasions ー漁村集落の避難から生活復興までー	山口 剛	和歌山大学 環境システム学科	8
11	ゆるる ～木洩れ日を主題とした遊び場空間の設計～	松尾 紀恵	京都府立大学 環境デザイン学科	8
12	感情と建築の両義性 ー心のケアと生活支援ー	奥西 有希	武庫川女子大学 生活環境学科	7
13	「まちにゆとりを生む家 ー滋賀に建てる小さな家の提案ー」	筒井明日実	滋賀県立大学 生活デザイン学科	5
14	のぼれば ～信貴生駒スカイライン再生計画～	岸井 雅之	大阪成蹊大学 環境デザイン学科	10
15	UBUNTU ～はるかかなた、もう消えてしまった世界へ～	布江田望月	京都大学 建築学科	15
16	変わりゆくもの、変わらないこと。	土田冴恵子	大阪大学 地球総合工学科	6
17	記憶を辿る道 ー遺跡と工場跡による再構築ー	高原 琢磨	京都工芸繊維大学 造形工学科 (建築1)	8
18	おもかげを紡ぎ変わりゆく下町 ー海老江における集合住宅群の提案ー	新田 直己	関西大学 建築学科	4
19	生態系博物館	池田 桃子	武庫川女子大学 建築学科	6
20	とうふや ー小規模コミュニティにおける公共空間の提案ー	松田 典子	大阪市立大学 居住環境学科	10
21	『落水村』	下崎 愛子	明石工業高等専門学校 専攻科	6
22	水土の郷	延原真由香	奈良女子大学 住環境学科	5
23	おおきな家 ー子ども×お年寄り×まちー	深田 櫻子	神戸芸術工科大学 環境・建築デザイン学科	9
24	水郷の絵巻 「風雨巷屋」鳥鎮臨水芸術施設群	蔣 夢予	立命館大学 建築都市デザイン学科	6
25	「象るまち ー乗り換え駅と地域のあいだにー」	永宗 紗季	摂南大学 建築学科	6
26	Windows Shopping ～都市と商空間の関係の再編集～	猪部 開	神戸大学 建築学科 (都市デザイン)	5

(受付順) 以上26点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
平成24年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第67回）審査報告

審査員長 若林 亮

平成25年4月9日（火） 審査会場・大阪科学技術センター（7階701号室）

審査員長（互選） 若林 亮
審査員 上羽 一輝・内海 慎介・大西 久晴・島崎 清秀・竹田 芳之・富田 昌義
(50音順)

応募作品 26点（別紙参照）

審査経緯

本年の応募は20大学・1高専、26作品であった。審査会では最初に投票を行い、票のあった13作品について議論し、その後、特に票が多かった5作品について詳細な議論をして入選3作品が決定した。本年も大きな傾向として地域や街を主にして建築（群）を提案するものと、単体の建物を主に街への提案を行うものに大きく分けられたが、結果として入選した「THE ART CRANE」「UBUNTU」「水郷の絵巻」の3作品は、いずれも単体の建築をテーマにしたものであった。これら3作品は、明快なコンセプトと優れた表現力を通して豊かな感性を感じる力作であり、実際に建った姿を見てみたいと思わせるほど、一つの建築としての現実性を感じることができた。言い換えれば、卒業制作として現実の背景、風景に向かい合い、その解決に取り組む姿勢が感じられたことが各審査員から高い評価を得た。一方、地域やまちを主にした作品はいずれも「まちづくり」のシステムの提案に留まっていて、建築としての提案に乏しく、敢えて言えば、このシステムや建築（群）ができることで本当に街は良くなるのか、と言った現実性がいずれの作品にも感じられなかったことが残念であった。

卒業設計は当然のことながら施主がいるわけではなく、予算の制限もない。自らが学生時代の生活の中で学び感じてきたことを自由に図面に創造することができる。しかし、重力（構造的な制約）や方位（日照や採光の制約）など、その創造の中でも守らなければならない制約がある。あきらかに構造的に破綻しているもの、方位が描かれていない図面など、昨今の卒業設計は全てが自由に任されていることが気になる。選には漏れたが、「まちにゆとりを生む家」は派手さこそなかったものの、これらの制約を踏まえて三つの異なる街に対し、あるべき家の姿を提案している点、さらには矩形図まで含めて図面が丁寧に描かれている点で、建築の基礎を真摯に学んできた学生作品であることを感じ、大変嬉しく思った。

（若林）

審査概評

昨年に続き審査に参加したが、社会的状況への対応を主題とするものと、建築的な表現に主眼を置くものとの分化してしまい、双方を兼ね備えた作品が少ない様に感じられた。テーマを自由に設定し、自分の考えや思いを表現できる、卒業設計という機会においては、数枚の図面に説得力ある全体像を提示することが重要であり、建築を考える上で、今後の指針となるものを創り上げてほしい。

審査に当っては、応募26作品に対する各審査員の一次投票により、13作品が得票したが、得票数をもとに議論を行い、4作品に絞り込まれた。その中からまず「The ART CRANE」が選ばれ、残り3作品について討議を行い、「UBNTU」、続いて「水郷の絵巻」が入選作となった。

詳細はそれぞれの選評によるが、選ばれた3作品は、テーマ設定とそれに対する回答、並びに建築的な表現において、他の作品より総合的に優れたものと評価された。

「The ART CRANE」は、明快なプログラムと形態、豊かな表現力において、多くの審査員の支持を得た。「UBNTU」は、圧倒的な迫力ともものづくりへの執念が感じられたが、やや威圧的な建築構成に対する懸念が表明された。「水郷の絵巻」は、特色ある立地とそれに合致した構成・表現が、個性的かつ魅力的であった。

最終で選外となった「記憶を辿る道」は、テーマとシークエンスを持つ構成、手書き主体の表現の総合性は評価されたが、それぞれの深度において入選作に一步及ばなかった。

(竹田)

THE ART CRANE for Artists, for Citizens, for London.

本木 克弥君 (大阪工業大学)

ポストオリンピックのロンドン活性化を目指した計画です。ポッターズフィールドパークをかつてテムズ川に沿って多くクレーンを題材に、再開発で姿を消した芸術家村を復活させ、住民とのコミュニケーションの場、ロンドン港の賑わい文化、価値観の exchange の場、アートを発信する場として再構築したものです。

この計画をプライムなトライアングルにまとめた構想力は、建築的でありコンセプチュアルであり、また構造体の考え方にも言及があり、建築として多方面から考えられた案として高く評価できる。審査員の投票においても多くの票を集めたことは当然かもしれない。

ただ、公園の大きさに比して、また隣接するシティホールに比しても、とても大きなボリューム感があること、アイレベルからの威圧感好みの別れるところでしょう。

いずれにせよ、よく考えられ、かつ表現力も卓越した力作であることは間違いない。

(島崎)

UBUNTU ～はるかかなた、もう消えてしまった世界へ～

布江田 望月君 (京都大学)

貴重な東洋美術の宝庫ながら統合移転が取り沙汰された、歴史ある大阪市立美術館と、展示動物の種の保存問題を抱える、日本で3番目に古い天王寺動物園。同じ公園内にあり、存続のあり方が問われる2つの施設に着目し、現在の敷地にそれらを合体した施設が計画されている。他者への思いやりの意味を持つというアフリカ言語の「UBUNTU」をタイトルとして、そこに示されているのは、公園内に屹立する壁の内に配置された展示や読書のための空間と、それらと重い壁に囲まれて動物たちが放し飼いにされる姿である。

卒業制作としての作品性を問うならば、構成と表現は圧倒的であり、フォトモンタージュ、ドローイング、模型を駆使したプレゼンテーションの質と量では他の応募作品の追随を許さない力作である。ただ、文化と生物にかかわる冷静な問題分析から始まりながら、「ヒトが決して辿り着くはずのない一つの未来を描く」として展開されるストーリーとモニュメンタルで強制的な建築は、共感よりも疑問を呼び起こし、審査の過程でも、どう評価すべきか論議があったことを付け加えておく。

(富田)

水郷の絵巻 「風雨巷屋」 烏鎮臨水芸術施設群

蔣 夢予君 (立命館大学)

中国浙江省北部、烏鎮の水郷集落に劇場やレジデンス、美術館などからなる芸術施設群を計画する作品である。人々が文芸に触れ交流し、河沿いに連なる水郷景観特有の情緒を感じ、絵巻物のような世界を体験するというコンセプトが、その風景をイメージさせる色彩の紙面に、幽玄さを感じさせる技法で展開されている。水郷景観の空間要素を抽象化して継承されたデザイン、周辺の場所性(域)と関連づけられた施設配置、様々な地点に再現された水墨画のような原風景を望む視点(視點)、竹紋白亜壁と黄色石材壁が多雨によって醸し出す水郷独特の情緒、この建築と集落の各地を船で繋ぐ水郷絵巻の体験、これらが水郷の文脈を継承する手法として創り込まれており、その表現が他の作品にはない独特の色合いをもって強く訴えかけてきた。建築主体と周辺環境との繋がりをデザインし、その

風土を継承するというテーマに対峙するために、最適の敷地を選択されたのではないかと感じている。少々惜しまれるのは、建築主体の機能やその連携についてあまり言及されていない点である。しかし、多くは語られていなくとも、様々な建築形態と外部空間（隙間）など、心地よいスケール感と造形でデザインされている点を、作品・表現の完成度と共に高く評価させていただいた。

（上羽）